



学生協働交流シンポジウム参加報告



9月20、21日に山口大学で、大学図書館の学生スタッフによるシンポジウムが開催されました。参加したのは山口大学、島根県立大学、梅光学院大学、そして島根大学の四大学です。おそらく日本初となる今回の試みについて、参加した図書館コンシェルジュのリーダーを務める荒川さんにお話を伺いました。

——他大学の学生スタッフと交流してみてもどのように感じましたか？

「他大学の学生協働の方たちが、非常に密な関係を育んでいらっちゃって、自分たちももっとコミュニケーションを取りあうことが必要だと思いました。また、みなさんが情熱的な思いを持って図書館の活動にあたっていることに感銘を受けました」

——2日間の大まかな日程を教えてください。

「初日はまず、山口大学の先生による基調講演がありました。続いて、4大学の学生スタッフによる活動報告を行いました。各大学とも個性が光り、大変参考になる発表でした。プログラムの最後には、島根大学と山口大学の学生スタッフと図書館職員の代表者で、パネルディスカッションを実施しました。

その晩には、シンポジウムの第2部として料理を囲みながら、交流会が開かれました。シンポジウムのときには交流で

きなかったたくさんの職員さんや学生スタッフと話すことができ、充実した時間となりました。

翌日、2日目には山口市内の図書館を見学しました。島根大学図書館でも取り入れたい工夫や取り組みがたくさんあり、みんな真剣に職員さんの話をきいていました」

——これからの活動をどのようにしていきたいですか？

「今回のシンポジウムで各大学の活動にとっても刺激をうけました。

各大学のいいところを取り入れつつも、島根大学の図書館コンシェルジュらしく、次の世代につながるような活動ができるように努力していきたいです。

詳しくは図書館コンシェルジュのブログに各コンシェルジュが記事を書いているので、ぜひご覧ください」

蔵書リユース市開催のお知らせ

図書館主催の「蔵書リユース市」の季節が近づいてきました。通算7回目の開催になる今回も、各種廃棄図書およそ6,000冊（予定）をとり揃えて、皆さんのお越しをお待ちしています！

期間：11/9（水）～11/11（金）
会場：大学会館3階 大集会室

■リユース市に関するお問い合わせ先
島根大学附属図書館 企画・整備グループ
電話：0852-32-6084



CONTENTS

学生協働交流シンポジウム参加報告
蔵書リユース市開催のお知らせ

ブック★コンパス

——「地球科学」

お薦め図書

——『ここまではわかった新・太陽系』

つぶやきライム

——第19回「本の将来」

ライムのぼんやりトーク

2011・第65回 読書週間



信じよう、本の力

10/27～11/9



〈ブック★コンパス〉 地球科学

テーマに沿って、図書館のおススメ図書を紹介するコーナー「ブック★コンパス」。今回は図書館コンシェルジュによる企画展示、テーマは幅広く「地球科学」です。地球環境の問題から、東日本大震災や放射能汚染、さらには、生命の起源をたどる本まで、幅広く取り揃えてあります。

どれも一般向けの本で専門書というわけではないので、テーマに気後れせず気軽に読んでみてはいかがでしょう？
本誌の裏面には、担当したコンシェルジュからのおススメの一冊の紹介があります。ぜひ、こちらも一読ください。

お薦め図書

このコーナーは毎回様々な人が選んだお薦めの本を紹介するコーナーです。
今回は総合理工学部 4 回生の図書館コンシェルジュの推薦図書です。

ここまでわかった 新・太陽系 太陽も地球も月も同じときにてきてるの？ 銀河系に地球型惑星はどれだけあるの？ 井田茂, 中本泰史著 【444/P18 2F 閲覧室】

ブックコンパス「地球科学」から今回オススメするのは、『ここまでわかった 新・太陽系』です。

SoftBank Creative サイエンス・アイ新書シリーズの新書は、基本的にすべてオールカラーでリーズナブルな価格設定となっており、近年流行している理系新書シリーズの中でも特にオススメです。この本はサイエンス・アイ新書シリーズの利点を最大限に生かしており、太陽系惑星の美麗 CG イラストと著者のわかりやすい解説を同時に楽しめる本です。

この本の中盤までは、太陽系の惑星（水星、金星、地球、火星…）およびその衛星（月や、生命の存在が示唆されているエウロパ）などの性質（気温はどのぐらいか、大きさは、内部はどうなっているのか？）の解説、そして惑星の研究手法（望遠鏡を使う、人工衛星による探査、地球上に落下した隕石の化学分析）の解説をメインテーマとしています。そういった教科書、図鑑的な部分もとても楽しく読むことができるのですが、僕がこの本の中で最も注目して欲しいと思っ

ているのは、第7章、第8章の「系外惑星」探査に関する解説です。

1940年代ごろから、科学者たちは太陽系と同じように、太陽以外の恒星の周りを回っている惑星が存在しているのではないかという仮説に基づき探査を始めました。系外惑星の探査は非常に高度な技術が必要なため、初めて系外惑星が発見されたのは1995年のことですが、ここ数年は、惑星の発見ラッシュが起こっています。最近のニュースの報道によれば科学者たちの提案する生命存在条件を満たしていると考えられる惑星（！？）も続々発見されているようです。資金不足により凍結されていた地球外知的生命体探査機関 SETI（誰でも無料で参加できます！！）のプロジェクトも再開のめどがついたようですし、あなたもこの本を読めば、人類と宇宙人が出会う日もそう遠くはない（？？）と想像をふくらませることでしょう。（masa）

つぶやきライム～図書館職員のメッセージリレー～

第19回 本の将来

作家のアレックス・ヘイリー氏がコー川を溯って、村の語り部の話を聞きに行きます。この老人は明治時代だけをといっても無理で、天照大神の時代から延々と聞かないといけません。うつらうつらした頃、「クンタ・キンテが川へ木を切りに行き帰ってこなかった。」というくだりが聞こえてきます。小説『ルーツ』の感動の場面ですが、注目したいのはこの語り部です。恐らくはこれが、基本的な情報の記録・伝達の姿であろうと思われます。

一方で、パピルス、羊皮紙や紙、そしてグーテンベルクの活版印刷といった本の歴史を習いましたが、電子媒体の誕生はこの歴史を根底から覆すもので、これにより木の下語り部の話を瞬時に全世界で聞くことができます。

こういう時代において、本はどういう道をたどると思うかという質問を、図書館司書の通信教育を受けている頃、受けたことがありました。その時、「恐らく、情報の記録・伝達という本の役割は減び、装丁や挿絵を含めて観賞する趣味の世界で生き残るだろう。」と書いたことを覚えています。というのも、ある研修会で香道のご教示を受けた際、今のような香木を嗜む香道は、室町時代に確立されたと聞きました。そういえば華道でも茶道でも、確立されたのは室町時代です。そのうち、本における室町時代が到来して、本道が確立され、作家、挿絵画家、出版社などが千家十職のようなあり方で残るかもしれないと思った訳です。

この時は、漠然と文学作品の復刻版を思い描いていたのですが、10年近く経った今、改めて、文学や絵本はこういう形で残るかもしれないけれど、科学分野においては、紙媒体は完全に廃れていくのだろうと思います。そういう目で、返却された本のビジュアルなカバーや表紙を眺めると、本当に消えていくのかなあと淋しい気持がします。（NS）



ライムのぼんやりトーク



けんさくくん
ああ、夏休みも学祭も終わって、後期も本格始動だね。



みいなちゃん
気候もすっかり涼しくなってきたから、風邪をひかないように気をつけなくちゃ。



ライム博士
2人とも、体調管理にはくれぐれも気をつけるんだよ。なにせ、季節の変わり目に祟り目なんて言葉もあるのだ。



みいなちゃん
そんなウソをおっしゃっては困ります、博士。



けんさくくん
それはさておき、なんだか紙面の雰囲気が変わってない？ここにもコーナー名が付いているし。



ライム博士
そのとおり。皆が読みやすい紙面を目指して、今回、新たに紙面デザインの様々な部分を見直したんだ。君子は豹変するということのように、「LiMe」も日々、進化しているんだ。